

# 越後平野における縄文時代晩期末葉の集落に関する基礎的研究

荒川 隆史

## 1 研究の目的

縄文時代晩期末葉の集落である青田遺跡の研究は、河川を中心とする漁撈をベースとして、クリを食料及び建築材として計画的に利用し、低湿地に適応した集落の形成がなされたことを明らかにした〔新潟県教育委員会ほか 2004, 荒川 2018b など〕。また、酸素同位体比年輪年代法による掘立柱建物の木柱の分析によって、下層集落が紀元前 6 世紀前半、上層集落が紀元前 5 世紀後半で、各 10 年程度の集落が営まれていたことが明らかになった〔木村ほか 2004・2012 など〕。一方、長さ 210m にわたる集落の調査が行われたにもかかわらず、墓域が検出されていないことが調査段階から続く課題であった。さらに、下層集落の形成後に空白期間をあけ、再び同じ場所に回帰して上層集落を形成していたことから、空白期間中に他所でどのように集落形成が行われていたかも重要な課題となった〔荒川 2018 a〕。これらの課題を解決するためには、同時期の他遺跡の様相を含めたセトルメント・システムの検討が必要がある。

そこで、本稿では越後平野およびその周辺で発掘調査が行われた遺跡を対象として、遺構の様相を明らかにし、遺跡ごとの特徴を把握することとする。そして、青田遺跡と同時期の遺跡にどのようなバラエティーがあるのかを検討したい。

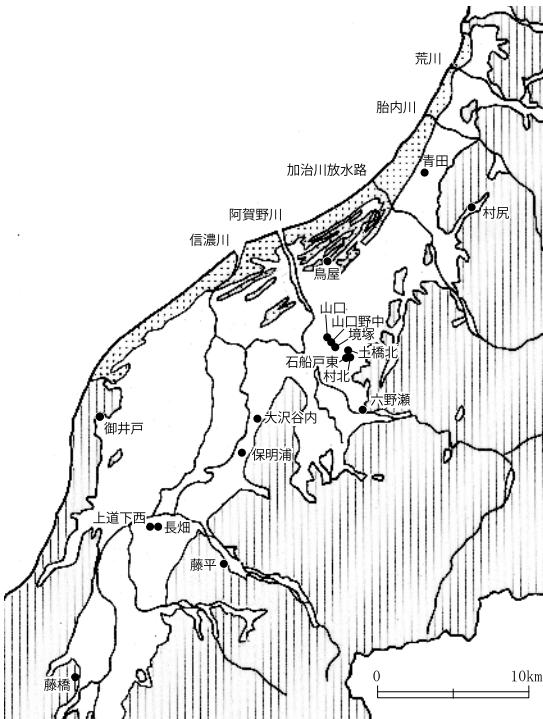
## 2 遺構の分析

### (1) 対象遺跡及び分析方法

対象とする時期は、晩期末葉の鳥屋 2a 式～鳥屋 2b 式〔石川 1988〕の時期とし、土器編年は荒川〔2004a・2017a〕に従うこととする。

対象遺跡は、新発田市青田遺跡・村尻遺跡、新潟市鳥屋遺跡・大沢谷内遺跡、阿賀野市山口遺跡・山口中遺跡・境塚遺跡・土橋北遺跡・村北遺跡・石船戸東遺跡・六野瀬遺跡、田上町保明浦遺跡、三条市長畠遺跡・上道下西遺跡・藤平遺跡 A 地点である（第 1 図）。このほか、新潟市御井戸遺跡や長岡市藤橋遺跡にも晩期末葉の遺構があるものの、時期幅があるため、本稿では対象外とする。

分析項目は、遺跡の立地、時期や継続期間、遺構の種類及び構成などである。掘立柱建物の平面型式や規模は荒川〔2009・2018a〕に従う。また、土坑の規模は荒川〔2014〕の検討結果を基準とする。なお、遺構の計測や観察は筆者による結果を示すこととする。



第 1 図 縄文時代晩期末葉の遺跡位置図

## (2) 青田遺跡（第2図）

新発田市青田遺跡は標高マイナス1m～プラス1.6mの沖積低地に位置する〔新潟県教育委員会ほか2004〕。遺跡は河川に沿って形成された自然堤防上に立地する。縄文時代の青田遺跡の西側には比較的広い淡水の湖沼が広がり、遺跡はこの湖沼に流入する河川の接続部付近に位置していたと推定されている〔高濱・ト部2004〕。遺物包含層であるⅧ層は厚さ約20cmで、遺物を包むシルト層（D・S5・S4・S3・S2・S1層）と、無遺物で砂質分の多いシルト層（K5・K4・K3・K2・K1層）が交互に重なるように堆積する。調査面積は14,160m<sup>2</sup>で、複数層による延べ面積は48,260m<sup>2</sup>である。時期は、S4～S3層期を中心とする下層集落が鳥屋2a式、S1層期の上層集落が鳥屋2b式・緒立1a期である。検出された遺構は、掘立柱建物58棟、貯蔵穴の可能性が高い土坑79基、杭列2か所、ピット257基、埋設土器11基、焼土を含む炭化物集中範囲269か所、堅果類廃棄範囲59か所などである。集落は河川の両岸に沿って並列するように形成されていることから、河岸集落とも呼べよう。

掘立柱建物は、長方形のA1類が4棟、SB1のような亀甲形のD1類が15棟、亀甲形の主軸柱のうち片側の飛び出しが短いD2類が12棟、SB4・5のようにD2類を母屋として張り出し柱が付属するG類が27棟である。母屋の面積から大型（15m<sup>2</sup>以上・SB4）・中型（8～15m<sup>2</sup>・SB5）・小型（8m<sup>2</sup>以下・SB1）に分類できる。木柱の耐久性等から大・中型は恒久的な居住施設、小型は作業施設と考えられる（荒川2009）。

貯蔵穴の可能性が高い土坑については、容積と上端長径との関係を基に小型（0.07m<sup>3</sup>以下）、中型（0.08～0.34m<sup>3</sup>）、大型（0.44m<sup>3</sup>以上）に分類した〔荒川2014〕。小型貯蔵穴は28基あり、長径1m以内、深さ0.35m以下である。断面形は台形状12基、半円状6基などである。SK717のように生粘土塊が出土するもののか、最下層からクルミ外果皮が出土するものがある。中型貯蔵穴は合計24基で、長径0.68～1.61m、深さ0.18～0.55mである。断面形状は袋状14基、台形状8基などである。河川近くに構築される傾向が認められ、SK1763のように最下層から完形のクルミ外果皮が出土するものが多い。大型貯蔵穴は3基あり、断面形状は袋状である。SK2372は底面から壁面下部にかけてヤナギ属枝とマタタビ蔓が3重に隙間なく敷き詰められ、上から入念に枝で固定されている。使用時は内部が湧水で満たされたはずで、固定材は敷物が浮き上がるのを防ぐためのものと推測される。こうした敷物は、底面から染み出る湧水の浄化を目的とした濾過材と推測され、堅果類などの食料や様々な有機物を水漬けして保存や処理等を行う施設と考えられる。

埋設土器は、SH1418のような土坑に土器を埋設するものは少数で、SH2448のように掘り方を持たず、土器の口縁部のみを地中に押し込むタイプが多い。なお、土坑墓は検出されておらず、墓域も不明である。

炭化物集中範囲は、SC1482・1483・1529のように屋外に形成されるものと、掘立柱建物と重複するものがある。SC1483・1529・1482は、長さ3.5mの範囲で炭化物集中範囲と粘土層が交互に重なって検出されたものである。SD1420-2c層期にSC1483が形成された後、2a層期にND1537上にSC1529、ND1488・ND1494上にSC1482が形成されている。ND1537・1494は、被熱による変色や炭化物も多量に含むことから、この上で燃焼行為が行われたことを示している。したがって、粘土範囲は地床炉の床であり、地中に含まれる水分の上昇を防ぐ役目があったと考えられる。一方、SB22の母屋中央にもSD1420-2c層～B9層までの炭化物集中範囲や粘土範囲が平面的に重なっている。掘立柱建物が機能していた2c層～2a層期のSC1742・1747・1744・1748は、建物に伴う炉跡の可能性が高い。

土器は750箱出土し、浅鉢・鉢・壺が一定量認められる。石核・剥片を除く石器は4,185点あり、石鏃

完成品は 13.1%、磨石類は 8.2% である。植物遺体はクリ・クルミ・トチノキが主体である。焼骨から見た動物遺体は、コイ科・タイ科・スズキ・ブリ・サケ科などの魚類や鳥類があり、陸獣は少ない。

### (3) 村尻遺跡（第3図）

新発田市村尻遺跡は、櫛形山脈と二王子岳の山麓に挟まれた谷底平野の微高地に位置する〔新発田市教育委員会 1982〕。遺跡の約 100m 北側を坂井川が流れており、標高は 36～39m である。縄文時代中期～晩期の集落と弥生時代前・中期の再葬墓からなる大規模な遺跡であり、調査区 A～E 区の範囲は東西約 200m に及ぶ。本稿では、鳥屋 2a 式～鳥屋 2b 式土器が比較的多く出土した A 区を中心に見ることとする。

A 区中央部では、弥生時代の遺構を除き 58 基の遺構が検出されている。11 号土坑は上端の長さ 66cm、深さ 76cm であり、断面形は U 字形を呈する。根固め石が確認できることや底面が硬いことから、掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。21 号土坑も同様であるほか、7 号土坑の底面にある落ち込みも柱穴と考えられる。ほかの土坑の中にも、掘立柱建物の柱穴と考えられるものが多数確認できる。1 号土坑は平面形が円形で、上端の長さ 134cm、深さ 74cm である。断面形は台形状だが、下半は袋状を呈す。埋土上位中央に径 10～20cm の自然礫があるほか、多量の土器・石器、骨片、耳栓、クリ・クルミの炭化物などが出士した。貯蔵穴とすれば大型のものである。

A 区西部では 29 基の遺構が検出されている。101 号土坑は上端の長さ 115cm、深さ 38cm で、埋土の堆積形状はレンズ場を呈し、貯蔵穴とすれば大型のものである。また、1・2 号溝は竪穴建物の壁溝の可能性が指摘されている。126 号土坑は C 区で検出されたもので、平面形は楕円形で、上端の長さ 110cm、深さ 20cm である。内部から鳥屋 2b 式に位置付けられる完形の浅鉢・甕・注口土器（1～6）が出土した〔石川 1985〕。後述する保明浦遺跡では、完形土器を収めた土坑墓が多数見つかっていることから、126 号土坑も墓の可能性を考える必要がある。

以上から、A 区中央部には掘立柱建物が存在する可能性が高く、貯蔵穴や土坑墓の可能性があるものも認められた。また、A 区西部では竪穴建物が存在する可能性があることが分かった。

### (4) 鳥屋遺跡（第4～6図）

新潟市鳥屋遺跡は、新砂丘 I-4 [新潟古砂丘グループ 1974] に立地し、標高は 1.8～1.2m である〔豊栄市教育委員会 1980、豊栄市 1988〕。鳥屋式土器 [磯崎 1957] の標識遺跡であり、鳥屋 1 式及び鳥屋 2 式の土器が豊富に出土した。遺跡の地形は、2～8T～Y グリッドが高く、これより北西及び南西側に向かって低くなっている。本稿では、1979 年に行われた発掘調査（第4図調査範囲図の R～Y グリッド）で検出された遺構を見ることとする。

第5図に遺構下端を加えた遺構全体図を示した。遺構は 194 基検出されている。23 号土坑は平面形が長さ 220cm の楕円形を呈し、深さは 127cm である。断面形は偏台形状で、下端が片側に寄っている。遺物の分布を見ると、下端上の壁側 50cm の範囲は遺物が少ないと読み取れる。50A・50B 号土坑も平面形が楕円形で、深さが約 1m、下端が片側に寄っている。また、底部近くが硬く締まっていることが報告されている。54 号土坑は平面形が楕円形で、深さ 130cm、断面形は片側が階段状を呈す。これらは、1 m もの深さを有し、下端は垂直な壁側に寄り、もう一方の壁は斜めあるいは階段状を呈すことが特徴である。こうした特徴を有する遺構の類例は、第19図に示した藤平遺跡 A 地点 12 号掘立柱建物の柱穴をはじめとする掘立柱建物の柱穴以外に認められない。したがって、これらの遺構は掘立柱建物の柱穴と考えられ

る。73B号土坑も柱穴と考えられる。下端の円形に網掛した範囲からヤマトシジミが多量に出土したが〔荒川・卜部2017〕、柱の礎板の代わりか、柱抜き取り後の廃棄と考えられる。ほかにもこうした特徴が認められる土坑が多数あることから、鳥屋遺跡では掘立柱建物があった可能性が高い。

75A号土坑は、現存長が4.98mで、隅丸方形を呈すると考えられる。内部に柱穴が並ぶことから、堅穴建物の可能性が指摘されている。隅丸方形を呈する堅穴建物は、第18図の上道下西遺跡に類例がある。

土坑から形を保った土器が出土した例がある。10号・66A号土坑は掘立柱建物の柱穴の可能性があり、それぞれ埋土上部から大型壺1・浅鉢2が出土した。73A号土坑は、中央から鉢の底部が出土した。また、58・60号土坑は、内部や縁辺から甕3・4が出土した。これらは底面から浮いた位置にあり、後述する保明浦遺跡の土坑墓と特徴が異なる。

120号土坑は、長さ145cmの円形を呈し、埋土はレンズ状に堆積する。貯蔵穴とすれば、大型のものである。47A・130号土坑は中型貯蔵穴の可能性があり、47A号土坑からは生粘土が出土した。21C号土坑は小型貯蔵穴の可能性があり、ヤマトシジミ173点が出土した。

以上から、鳥屋遺跡には掘立柱建物と堅穴建物が存在する可能性が高く、これらは標高の高い範囲に分布する。一方、中・小型の貯蔵穴の可能性がある土坑は、標高の低い側に分布する傾向が認められる。

#### (5) 山口野中遺跡（第7図）

阿賀野市山口野中遺跡は、標高約5～6mの沖積地に位置する〔新潟県教育委員会ほか2015〕。遺構全体図を見ると、遺構は北東側に向かって緩やかに傾斜する自然堤防上にあり、この東西に河川が存在すると想定されている。堅穴建物1棟、炭化物集中範囲46基、埋設土器17基、土器集中15か所、ピット24基が検出された。時期は鳥屋2a式古段階であり、短期間と考えられる。

SI860は長さ6.86mの円形のもので、中央に地床炉を持つ。炭化物集中範囲は、長さ8.37mのものをはじめとして、規模の大きなものが多い。SC842は中央部に暗赤褐色シルト層と炭化物層が交互に3回堆積し、盛土状を呈す。炭化物層から炭化したオニグルミ果皮のほか、コイ科・サケ属などの魚類や鳥類の焼骨が多く出土した。写真で見る限り、暗赤褐色シルト層は青田遺跡の炭化物集中範囲に伴う粘土範囲に類似し、シルト層と炭化物層が交互に堆積する点も青田遺跡のSC1529・1482とND1537・ND1488・ND1494との関係に酷似する（第2図）。埋設土器は、824のように土坑内に1～3の複数の土器を納めるものや、908のように土器4を納めるもの、928のように土器5・6を入子状に納めるものなどがある。

以上から、山口野中遺跡では炭化物集中範囲を利用した生業活動が中心であったと考えられる。

#### (6) 境塚遺跡（第8・9図）

阿賀野市境塚遺跡は、標高7～7.6mの自然堤防上に立地し〔新潟県教育委員会ほか2018〕、山口野中遺跡から南東に約200mの地点にある。遺跡の東側に縄文時代晚期の幅約250mの大規模な河道が確認され、旧阿賀野川河道と推定した〔荒川2020〕。その左岸に当たるSR2444は深さ約4mあり、堆積層の切り合いから大きく1～13層に分層され、下層の12層と上層の8・5・3層から縄文時代晩期末葉の遺構や遺物が見つかった。時期は、下層の12層が鳥屋2a式、8・5層が鳥屋2b式、3層が青田遺跡SD1420-B9～B7層期に並行する緒立1a期である〔荒川2020〕。境塚遺跡の下層と山口野中遺跡が同時期となる。

下層では、SR2444の河床近くの河川斜面部に炭化物集中範囲が検出され、土器がわずかに伴う。上層では、SR2444の埋積と自然堤防の形成とともに、SC5510・5525・5532～5534・5541が同一地点に形成

される。遺物は土器 555 のような甕・深鉢がわずかに出土するのみである。

境塚遺跡の成果は、短期的な河川利用が同じ地点で繰り返されていたことが明らかになった点である。また、山口野中遺跡を補完する遺跡としても重要である。

#### (7) 土橋北遺跡（第 10 図）

阿賀野市土橋遺跡は、標高約 6m の沖積地に位置する〔新潟県教育委員会ほか 2019b〕。自然流路 SR10 の両岸から埋設土器 4 基、炭化物集中範囲 1 か所、土器集中 19 か所、土坑 3 基などが検出された。時期は鳥屋 2a 式である。

炭化物集中範囲 SC14 は長さ 6.5m に及び、オニグルミ果皮やトチノキ種皮が大量に検出された。これと重複する埋設土器 SH48 には甕・深鉢の下半が納められている。土器内部の埋土 2 層は鮮やかな暗黄褐色シルトで、上面はほぼ水平となる。この直上の 1 層は多量の炭化物や焼土粒を含む。こうした埋設土器は他の遺跡では確認できない。筆者は現地でこの土層断面を観察しているが、2 層は青田遺跡や山口野中遺跡の炭化物集中範囲下にある粘土層と同じものである。粘土層上に炭化物層が密着するあり方も青田遺跡等と共通する。隣接する埋設土器 SH46・49 も同様の堆積状況を示す。したがって、これらの土器は炉体の可能性が高いと考えられる。土器集中からは大型の甕・深鉢が出土しており、堅果類の処理・調理などの作業が行われていた可能性がある。

#### (8) 村北遺跡・石船戸東遺跡（第 11・12 図）

阿賀野市村北遺跡は、土橋北遺跡の南約 600m に位置する。鳥屋 2a 式と見られる甕 1 や深鉢が単独で出土した〔阿賀野市教育委員会 2020〕。石船戸東遺跡は、土橋北遺跡から南西約 500m に位置する。ここでも鳥屋 2 式と考えられる深鉢 2 が単独で炭化物集中範囲に伴って出土した〔新潟県教育委員会ほか 2019a〕。こうした単独で甕・深鉢が出土する例は、山口遺跡〔(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023〕や山口野中遺跡〔阿賀野市教育委員会 2011・2016〕でも認められる。

前述した阿賀野市山口野中遺跡・境塚遺跡・土橋北遺跡を含め、山口遺跡から村北遺跡までの約 2.5km の間には、鳥屋 2a 式～鳥屋 2b 式の遺跡が多数存在することになる。これらは、阿賀野市の晩期末葉遺跡群と呼んでも過言ではなく、集落を検討するうえで重要である。

#### (9) 六野瀬遺跡（第 13 図）

阿賀野市六野瀬遺跡は、阿賀野川右岸の標高 22m の扇状地に位置する〔安田町教育委員会 1992〕。遺物ブロック 1・2 が検出され、出土土器は鳥屋 2b 式の基準資料となっている〔石川 1993〕。

遺構は、8 号土坑と埋設土器、焼土遺構 3 基と少ない。しかし、土器は浅鉢・深鉢・甕・壺が揃い、石器は 259 点出土した方は、遺構が少なく深鉢・甕を主体とする土橋遺跡とは対照的である。

#### (10) 大沢谷内遺跡（第 14・15 図）

新潟市大沢谷内遺跡は、信濃川右岸の標高約 3m の沖積地に位置する〔新潟市教育委員会 2020〕。時期は鳥屋 2a 式古段階の中でも古い時期と考えられる。本稿では、6 区の調査成果について見ることとする。

遺構は下面・中面・上面の 3 面に分かれ、下面で掘立柱建物 7 棟・土坑 46 基・炭化物集中範囲 27 基・焼土 36 基など、中面で土坑 25 基・溝 2 条・炭化物集中範囲 13 基・焼土 14 基など、上面で掘立柱建物 1

棟・竪穴建物 2 棟、土坑 94 基・炭化物集中範囲 8 基・焼土 10 基などが検出された。各面とも、おおむね 20m 四方の同じ範囲で溝に沿うように遺構が分布しており、繰り返し利用されていたことを示す。

下面の掘立柱建物の平面形は、A1 類が 1 棟、SB3 などの D1 類が 3 棟、SB11 などの D2 類が 2 棟、SB1 が D3 類である。SB7 のみ小型で、ほかは中型である。上面の竪穴建物 SI262 は、長さ 3.78m の円形を呈し、炉は確認されていない。SB1215 は平面形が D3 類で、中型である。土坑は小型・中型が主体を占める。SK933・SK995・SX416 は円形ないし楕円形の土坑で、内部から完形の深鉢 1～4 が出土した。後述する保明浦遺跡の土坑墓に類似し、注意を要する。焼土 F204 は、1 層と 3 層が粘土層、2 層と 4 層が焼土層であり、青田遺跡の炭化物集中範囲と同じように粘土層を床として燃焼行為が繰り返されている。同様の焼土は他にも認められる。

大沢谷内遺跡で特筆されるのは、同じ範囲を繰り返し利用していることと、同じ場所で掘立柱建物と竪穴建物が構築されていることである。集落の機能差や季節差を検討するうえで重要である。

#### (11) 保明浦遺跡（第 16 図）

田上町保明浦遺跡は、信濃川右岸の標高約 5 m の沖積地に位置する [田上町教育委員会 1993・1996・2003・2004]。2000～2001 年に合計約 6,100m<sup>2</sup> の調査が行われ、晩期後葉から弥生時代中期前葉の土坑をはじめとする多数の遺構が検出された。鳥屋 1 式・鳥屋 2a 式・鳥屋 2b 式・大洞 A' 式の遺構のうち、完形品や遺存率の高い土器が出土した土坑やピットを土坑墓と認定し結果、土坑墓 67 基、埋設土器 13 基を抽出した [荒川・阿部 2022]。

第 2 次調査区では、土坑墓 15 基・埋設土器 3 基を抽出した。土坑墓は、SK13 のように浅鉢と甕といった複数個体を納めるものや、SK15 のように大型土器を横位に据えるもの、逆位に据えるもの、小型土器のみを納めるものが認められる。ほかに貯蔵穴と見られる中型土坑が認められるものの、掘立柱建物は確認できない。他の調査区については、拙稿に委ねることとした。

保明浦遺跡の極めて重要な点は、沖積地で晩期後葉から弥生時代中期前葉まで途切れることなく大規模な墓域が形成されたことである。

#### (12) 長畠遺跡（第 17 図）

三条市長畠遺跡は、信濃川右岸の標高約 10m の沖積地に位置する [新潟県教育委員会 1975, 栄村教育委員会 1979]。時期は鳥屋 2b 式を主体とする [荒川 1998]。当該期の可能性がある遺構は、土坑 4 基とピット 1 基である。県調査 1 号ピットは、長さ 83cm の円形を呈し、断面形は台形状である。中型土坑の可能性がある。村調査 SK1 は断面形が袋状土坑に似ていることから、中型貯蔵穴の可能性がある。

長畠遺跡の特徴は、完形の大型深鉢・甕が多数出土したことである。ほとんどの個体がつぶれた状態で出土したと考えていたが、村報告書の写真を確認すると、大型甕 1 [荒川 1998] は別個体の内面を上にした破片上に完形のまま逆位の状態で出土したことが分かった。前述した保明浦遺跡の出土状態に似ていることから、埋設土器あるいは土坑墓の可能性を検討する必要がある。

#### (13) 上道下西遺跡（第 18 図）

三条市上道下西遺跡は、信濃川右岸の標高約 8m の沖積地に位置する [新潟県教育委員会ほか 2012]。長畠遺跡から西側に約 700m の地点にある。時期は鳥屋 2a 式新段階から緒立 1a 期と考えられる。

遺構は、竪穴建物4棟、土坑9基である。竪穴建物の平面形はSI202・203・204が楕円形で、SI201は円形と推定されている。いずれも壁溝が巡る。SI201は長さ3.62m、深さ26cmで、SI202に切られていることから、複数時期にわたって建物が構築されたことを示す。SI202は長さ8.88m、深さ24cmで、竪穴建物としては大型である。埋土から土器1・3などが出土した。土器2はSI204から出土した。土坑は比較的大きいものが多い。SK201は竪穴建物群から約20m離れた地点で検出されたものである。長さ3.24mの楕円形で、深さは18cmである。深鉢が1個体出土した。SK204からは管玉4が出土した。

上道下西遺跡は、沖積地に竪穴建物を構築する点で大沢谷内遺跡と共通するものの、炭化物集中範囲や焼土が検出されておらず、両者の生業が異なる可能性がある。また、同時期の長畠遺跡との関係について、阿賀野市の晩期末葉遺跡群を参考に検討する必要がある。

#### (14) 藤平遺跡A地点（第19図）

三条市藤平遺跡A地点は、五十嵐川左岸の標高約62mの段丘末端に位置する。東西約73mの範囲に掘立柱建物19棟が環状に配置されており、掘立柱建物による環状集落としては縄文時代最後のものと考えられる。土器は鳥屋2a式新段階を主体とし、鳥屋2b式古段階も確認できる。

掘立柱建物型式の内訳は、A1類2棟、D1類4棟、D2類5棟、G1類8棟である。規模は大型6棟、中型13棟である。建物の主軸方向は、G1類が張り出し柱側を、D2類は主軸柱の突出が短い方を中央側に向ける規則性が認められる。また、2・3号、6・7号、8・9号、14・15号、16～19号の組み合わせで主軸方向が概ね共通する〔荒川2018a〕。12号掘立柱建物は長さ9.96mのG1類で、遺跡最大のものである。母屋の柱穴は細長い楕円形を呈し、下端が建物内側の壁際に寄っていることから、柱は建物内側に寄せて立てていたものと考えられる。注目されるのは、母屋のすべての柱穴から完形土器が出土したことである。いずれも下端の上から出土しているため、柱抜き取り後に埋納された可能性が高い。P6からは小型の浅鉢1・5、鉢2、深鉢3・4と、大型深鉢6・7が出土した。2号掘立柱建物でもP2から甕8・9が出土するなど、多くの建物において抜き取り後の土器埋納が認められる。こうした柱を片側に寄せる点や、柱抜き取り後の土器埋納は、鳥屋遺跡と共通する。

3号掘立柱建物P7は、建物に関係しない土坑である。平面形は長さ60cmの円形を呈し、深さは36cmである。底面付近から完形の大型深鉢10が出土した。こうした土坑は、保明浦遺跡の土坑墓と極めて似ており、墓の可能性があろう。柱穴への土器埋納については、保明浦遺跡の土器埋設土坑墓と異なるため、儀礼行為の可能性も含めて検討する必要がある。

### 3 まとめと課題

本稿で検討した結果と課題を以下にまとめる。

- ① 村尻遺跡及び鳥屋遺跡では、大型のものを含む掘立柱建物が存在する可能性が高い。両遺跡とも竪穴建物もあることから、掘立柱建物と竪穴建物が併存する集落の可能性がある。
- ② 鳥屋遺跡では、青田遺跡に類似する中・小型貯蔵穴が低地側に形成されている可能性が考えられた。
- ③ 阿賀野市では2.5kmの範囲に及ぶ晩期末葉遺跡群が認められた。河川に沿って炭化物集中範囲や焼土が形成され、植物利用をはじめとする特徴的な生業が遺跡単位で行われていた可能性が考えられる。長畠遺跡と上道下西遺跡も遺跡群として捉えるべきと考えられる。
- ④ 粘土層を床として燃焼行為を繰り返し行う炭化物集中範囲は、青田遺跡、山口野中遺跡、土橋北遺

跡、大沢谷内遺跡で共通することが明らかになった。

- ⑤ 大沢谷内遺跡では、沖積地の同所において掘立柱建物と竪穴建物を構築しており、上道下西遺跡の竪穴建物も含めて生業差や季節差を検討する必要性がある。
- ⑥ 藤平遺跡 A 地点では、柱抜き取り後の土器埋納や、土器埋設土坑墓と考えられるものがあることが分かった。これらは鳥屋遺跡や村尻遺跡のほか、大沢谷内遺跡にも類例があり、墓や儀礼行為の可能性を考える必要がある。

以上のような遺構の基礎情報について、今後は遺物の特徴なども加味し、晩期末葉におけるセトルメント・システムを検討していきたいと考える。

最後になりましたが、日頃から当方の研究に対しご指導・ご鞭撻をくださる谷口康浩先生にお礼申し上げます。

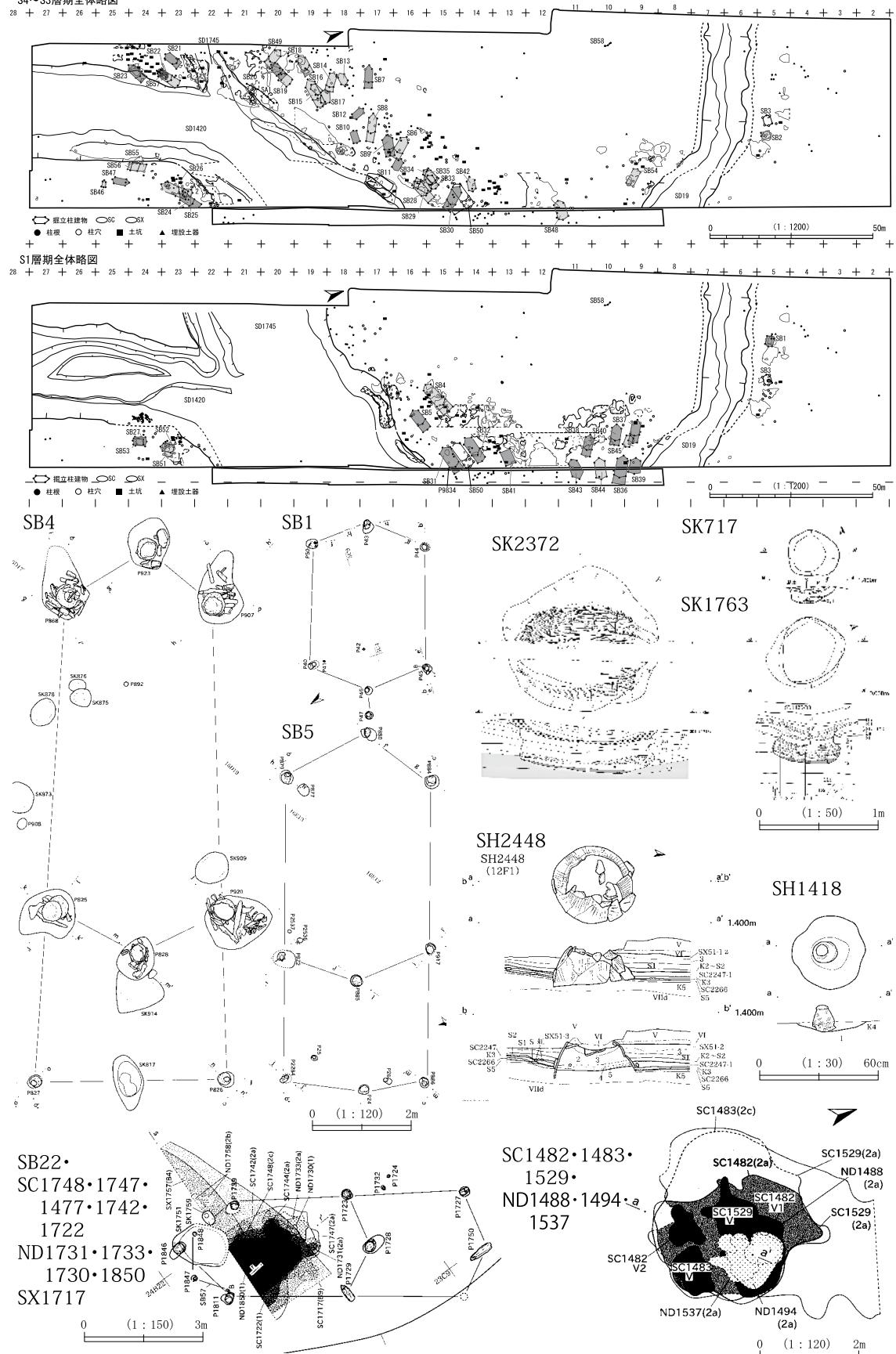
## 引用参考文献

- 阿賀野市教育委員会 2011 『境塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稻荷遺跡』  
阿賀野市教育委員会 2016 『山口野中遺跡』  
阿賀野市教育委員会 2020 『村北遺跡』  
荒川隆史 1998 「新潟県南蒲原郡栄町長畠遺跡出土の土器について－縄文時代晚期終末の様相－」『研究紀要』第 2 号  
(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2004a 「青田遺跡における縄文時代晚期終末の土器編年」『青田遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2004b 「青田遺跡の集落と生業」『青田遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2009 「掘立柱建物と建材」『縄文時代の考古学』8 同成社  
荒川隆史 2014 「堅果類の保存実験から見た新潟県青田遺跡の縄文時代晚期の貯蔵穴について」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 15 号、新潟県立歴史博物館  
荒川隆史 2015 「遺跡出土クリ材からみた縄文クリ林の生育環境」『研究紀要』第 8 号 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2017a 「縄文時代晚期～弥生時代前期の暦年代」『新潟県考古学会 第 29 回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会  
荒川隆史 2017b 「縄文時代におけるクリ果実の剥き方と保存方法について」『研究紀要』第 9 号 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2018a 「北陸の縄文晚期社会と社会組織—掘立柱建物集落の形成とクリ材利用からの視点—」『季刊考古学・別冊 25「亀ヶ岡文化」論の再構築』雄山閣  
荒川隆史 2018b 「青田遺跡の環境と縄文時代のクリ利用」『季刊考古学第 145 号 植生史と考古学』雄山閣  
荒川隆史 2019 「年輪年代」『新潟県の考古学 3』新潟県考古学会  
荒川隆史 2020 「阿賀野市における縄文時代晚期の大規模な河道について」『研究紀要』第 11 号 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2021 「新潟県における縄文時代の丸木舟による移動・運搬」『新潟県考古学会 2021 年度秋季シンポジウム「遺跡から読み取る新潟県の内水面交通」発表要旨』新潟県考古学会  
荒川隆史 2023 「北陸地方－青田遺跡の研究成果を敷衍させる－」『季刊考古学別冊 40 縄文時代の終焉』雄山閣  
荒川隆史・阿部泰之 2022 「保明浦遺跡における縄文・弥生時代移行期の墓域について」『新潟考古』第 33 号 新潟県考古学会  
荒川隆史・卜部厚志 2017 「新潟県胎内市北成田発見の縄文時代前期の貝塚について」『研究紀要』第 9 号 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史・木村勝彦・安島雄介・中塚武 2021 「酸素同位体比年輪年代法による縄文時代晚期～弥生時代中期の暦年代」『新潟考古』第 32 号 新潟県考古学会  
荒川隆史・千代剛士・木村勝彦 2015 「新潟県青田遺跡における縄文時代晚期の木柱の伐採季節」『新潟県立歴史博物館研究紀要第』16 号 新潟県立歴史博物館  
石川日出志 1988 「二、鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史資料編 1 考古編』豊栄市  
石川日出志 1993 「鳥屋 2b 式土器再考」『古代』第 95 号 早稲田大学考古学研究会  
磯崎正彦 1957 「新潟県鳥屋の晚期縄文式土器（予報）」『石器時代』第 4 号  
木村勝彦・斎藤智治・中村俊夫 2004 「青田遺跡における木柱の年輪年代学的解析による建物群の年代関係の検討」『青

田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
木村勝彦・荒川隆史・中塚武 2012 「鳥海山の神代杉による縄文晩期をカバーする年輪酸素同位体比の物差しの作成と実際の適用例」『日本植生史学会大会第27回公演要旨集』日本植生史学会  
(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2023『山口遺跡Ⅲ 第4次調査 山口野中遺跡Ⅳ 第4・5次調査 境塚遺跡Ⅴ 第5次調査 新町遺跡Ⅱ 第2次調査 石船戸東遺跡Ⅱ 第3次調査』  
栄村教育委員会 1979『長畠跡』  
新発田市教育委員会 1982『村尻遺跡Ⅰ』  
下田村教育委員会 1986『藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』  
高濱信行・ト部厚志 2004「青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)  
新潟県埋蔵文化財調査事業団  
田上町教育委員会 1993『保明浦遺跡』  
田上町教育委員会 1996『保明浦遺跡Ⅱ』  
田上町教育委員会 2003『保明浦遺跡Ⅲ』  
田上町教育委員会 2004『保明浦遺跡Ⅳ』  
豊栄市教育委員会 1980『鳥屋遺跡Ⅰ - 新潟県豊栄市・縄文晩期土坑群の発掘調査報告』  
豊栄市 1988『豊栄市史 資料編1 考古編』  
新潟県教育委員会 1975『埋蔵文化財緊急調査報告書第4』  
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004『青田遺跡』  
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012『上道下西遺跡』  
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『山口野中遺跡Ⅱ』  
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『境塚遺跡Ⅲ』  
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019a『石船戸東遺跡』  
新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019b『土橋北遺跡』  
新潟古砂丘グループ 1974「新潟砂丘と人類遺跡 - 新潟砂丘の形成史Ⅰ」『第四紀研究』第3巻第2号 日本第四紀学会  
新潟市教育委員会 2020『大沢谷内遺跡VI 第15・17・19次調査』  
三ツ井朋子・荒川隆史 2019「縄文時代における漆利用システムの検討 - 青田遺跡・野地遺跡の漆製品・漆要具を中心  
に - 』『研究紀要』第10号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
安田町教育委員会 1992『六野瀬遺跡 1990年度調査報告書』

遺構全体図

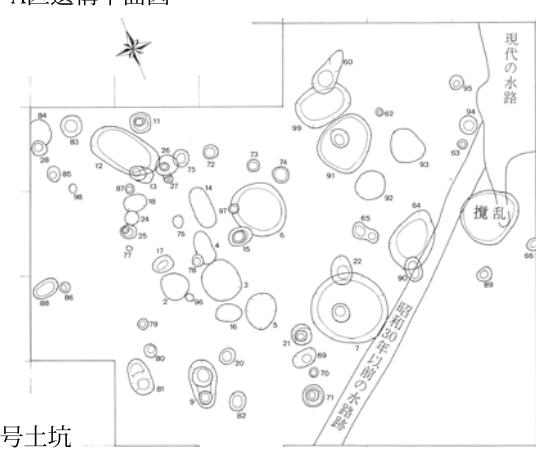
S4～S3層期全体略図



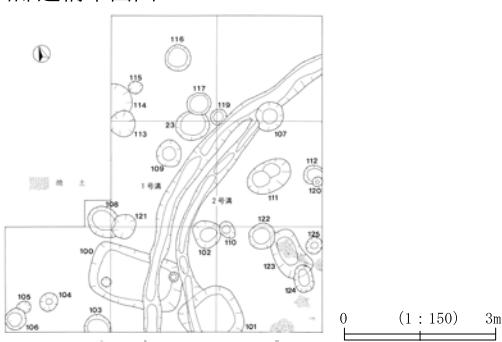
第2図 青田遺跡の遺構(新潟県教育委員会ほか2004から作成)



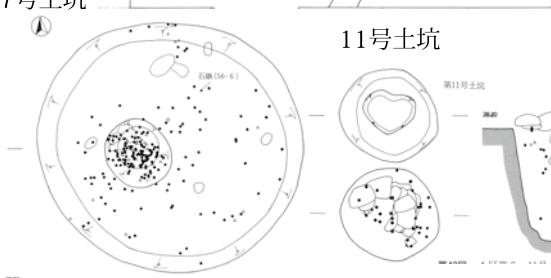
A区遺構平面図



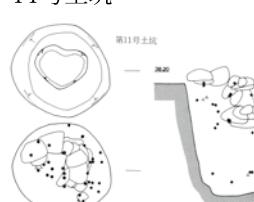
A区西部遺構平面図



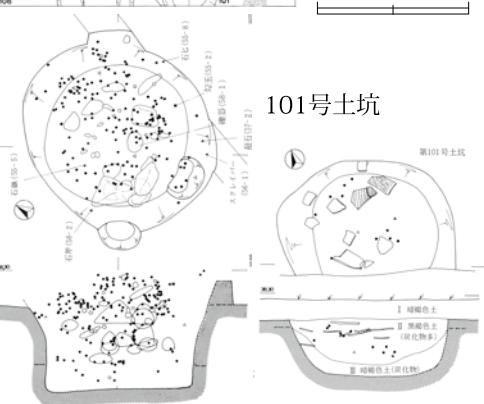
7号土坑



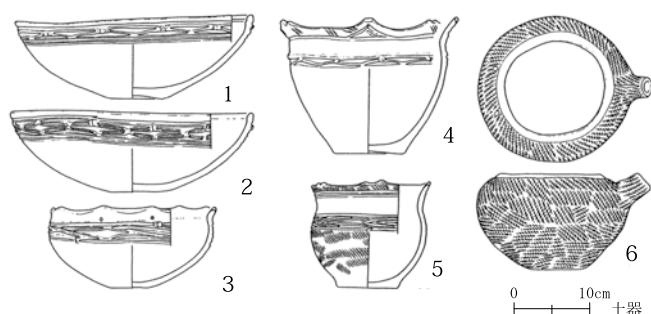
11号土坑



101号土坑



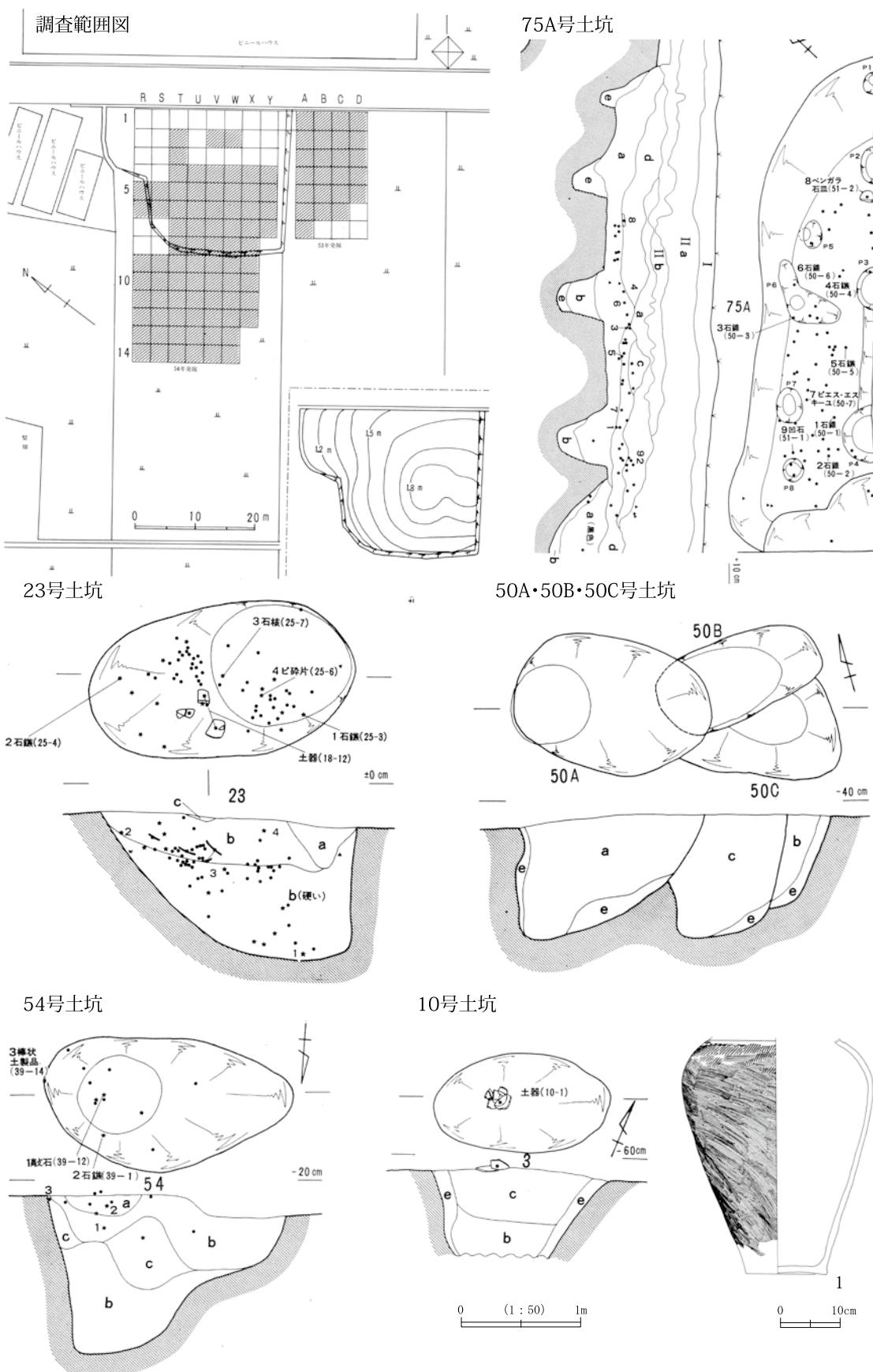
126号土坑



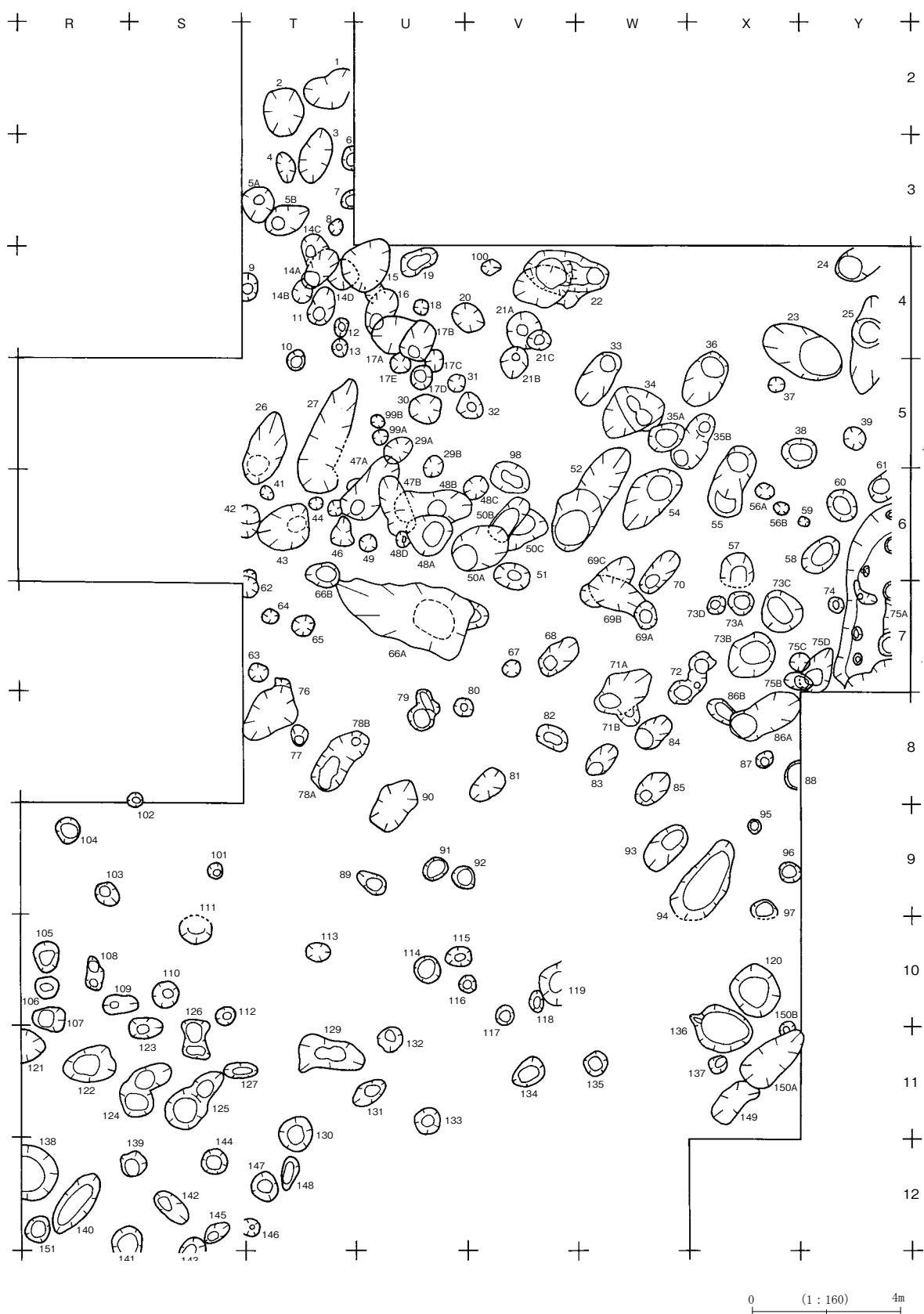
21号土坑



第3図 村尻遺跡の遺構(新発田市教育委員会1982・石川1985から作成)

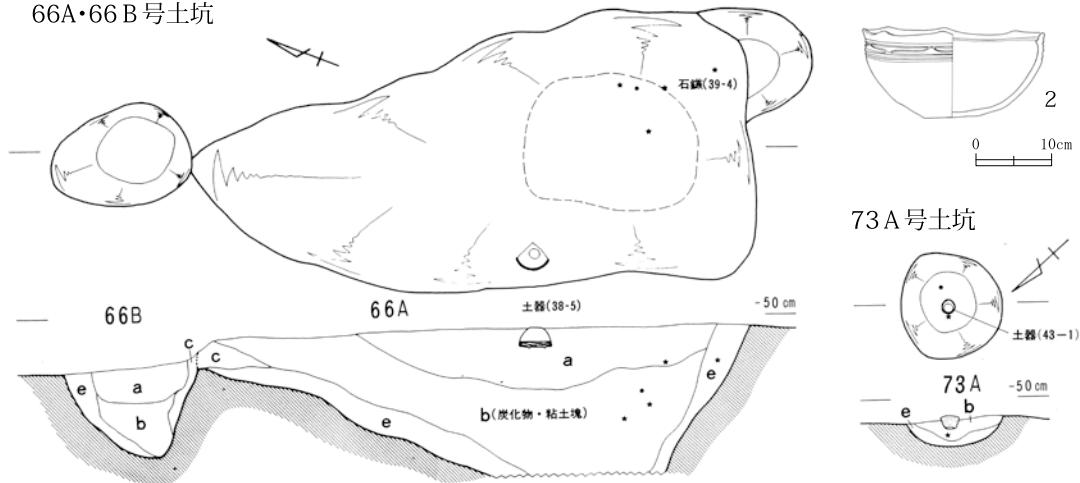


第4図 鳥屋遺跡の調査範囲と遺構(豊栄市教育委員会1980から作成)

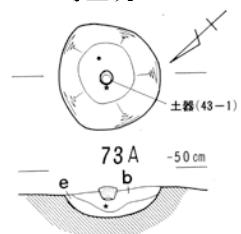


第5図 鳥屋遺跡遺構全体図(豊栄市教育委員会1980から作成)

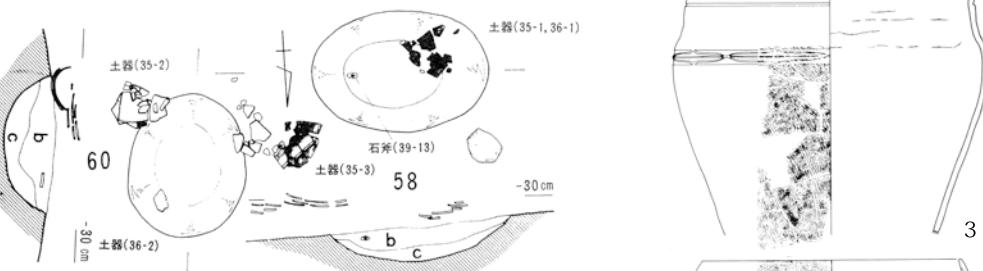
66A・66B号土坑



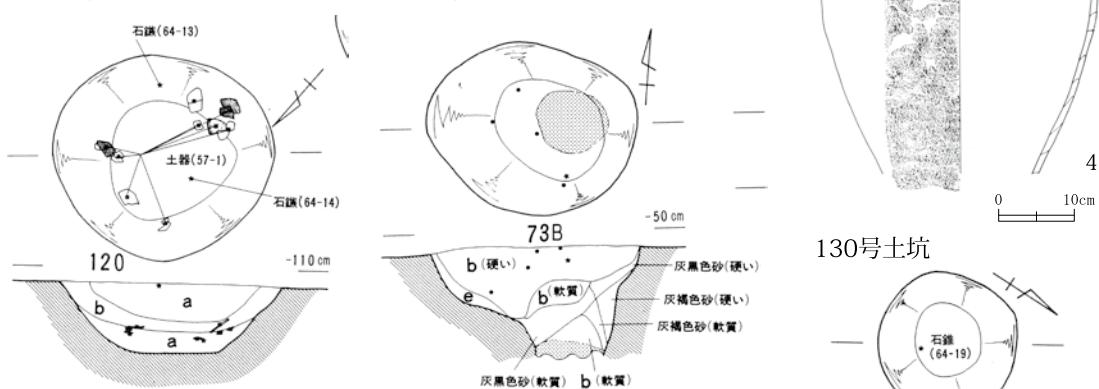
73A号土坑



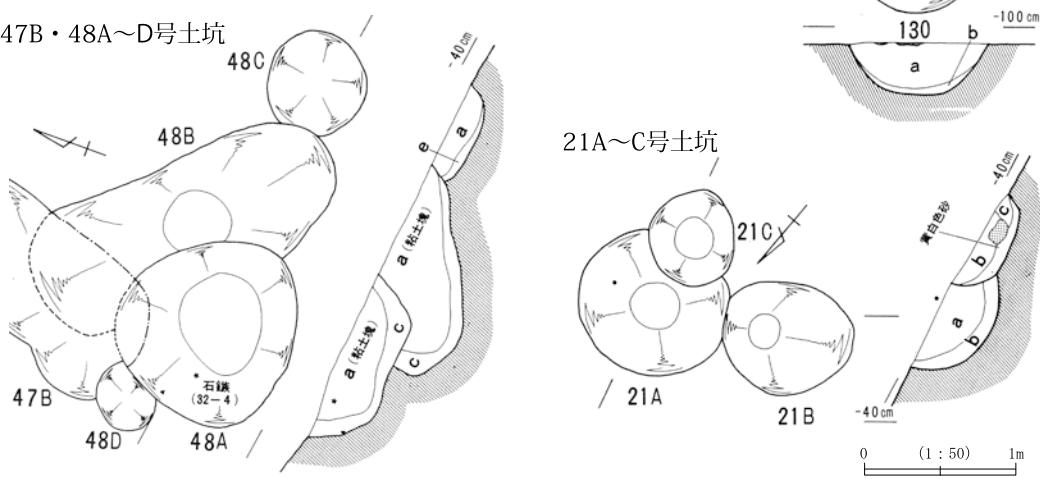
58・60号土坑



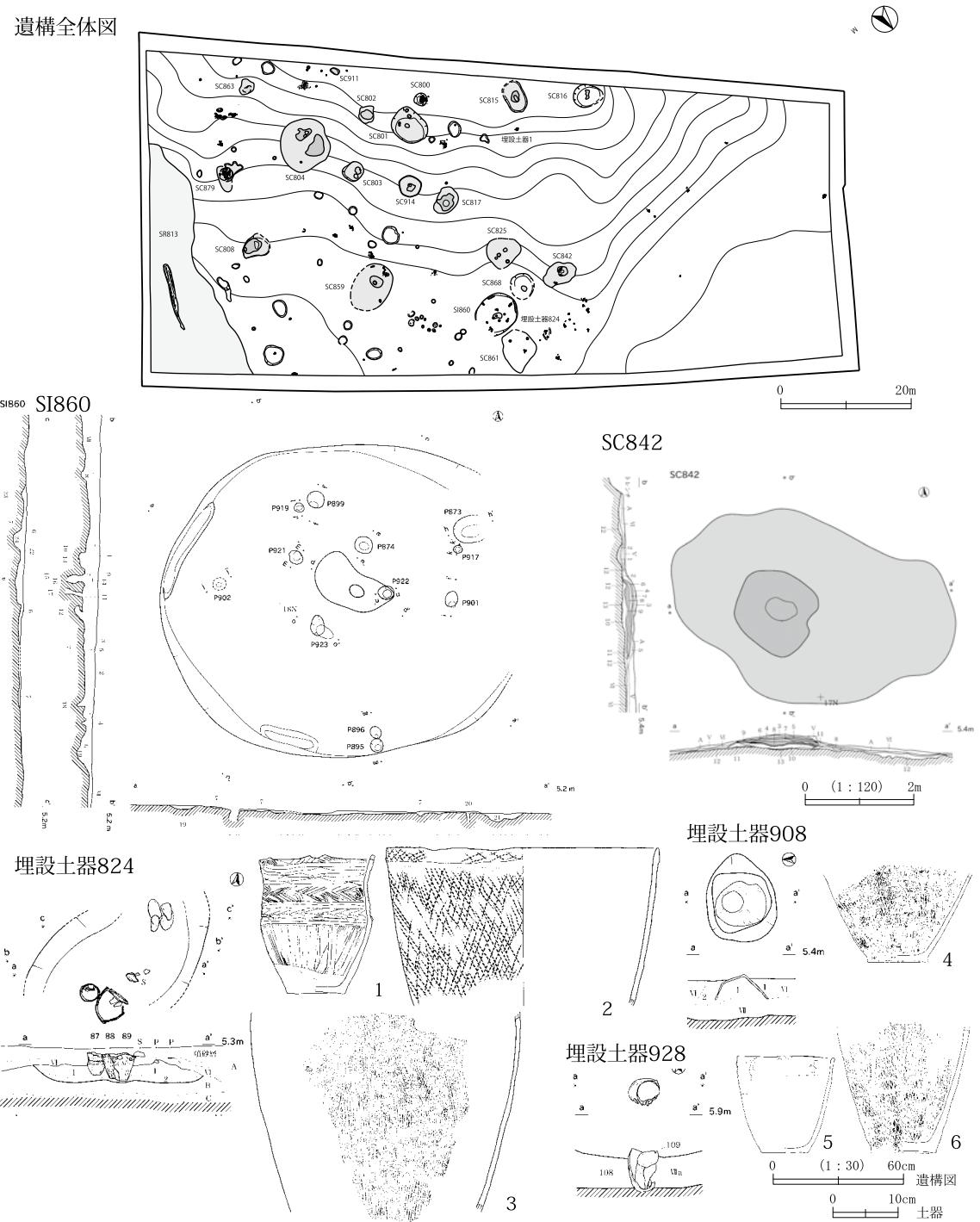
120号土坑



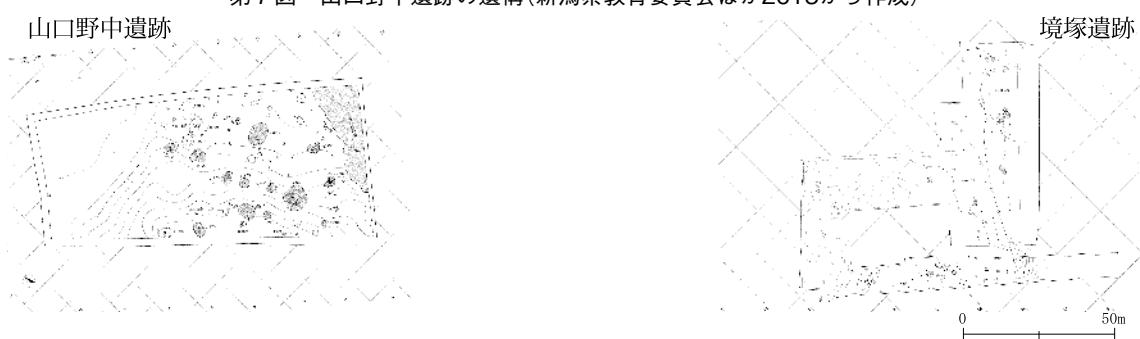
47B・48A~D号土坑



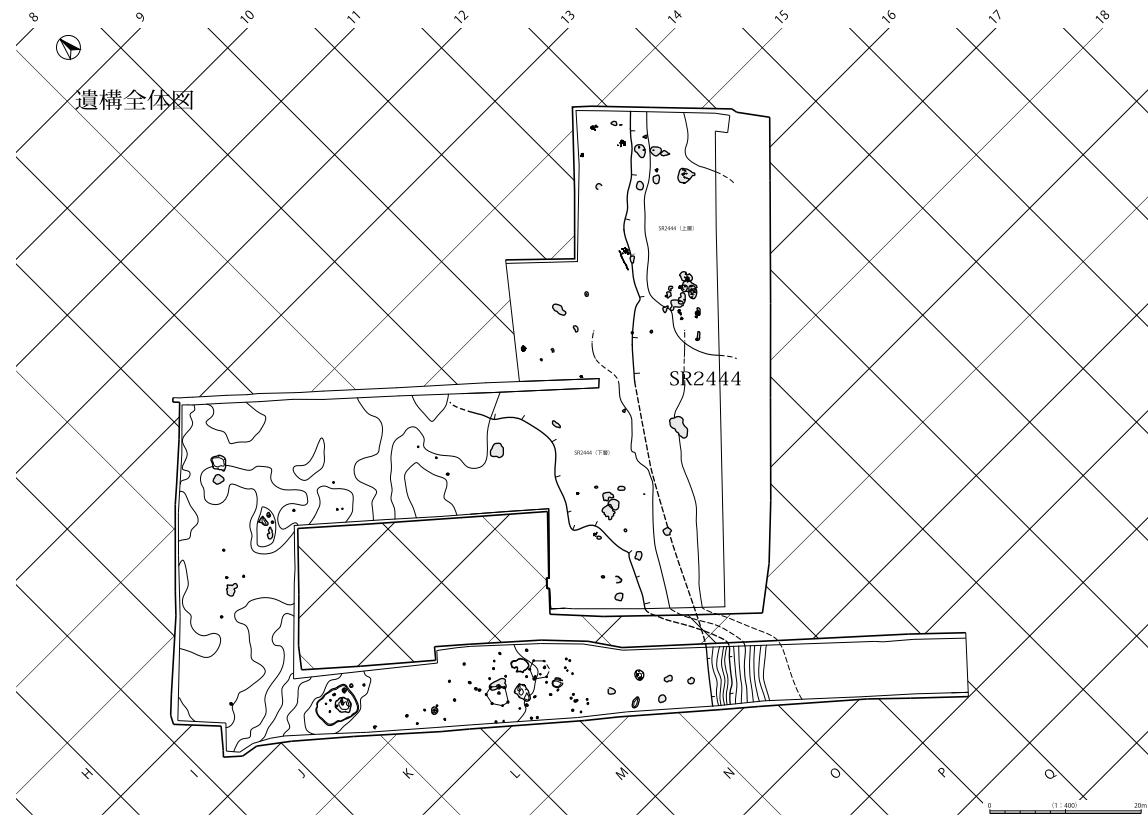
第6図 鳥屋遺跡の遺構(豊栄市教育委員会1980から作成)



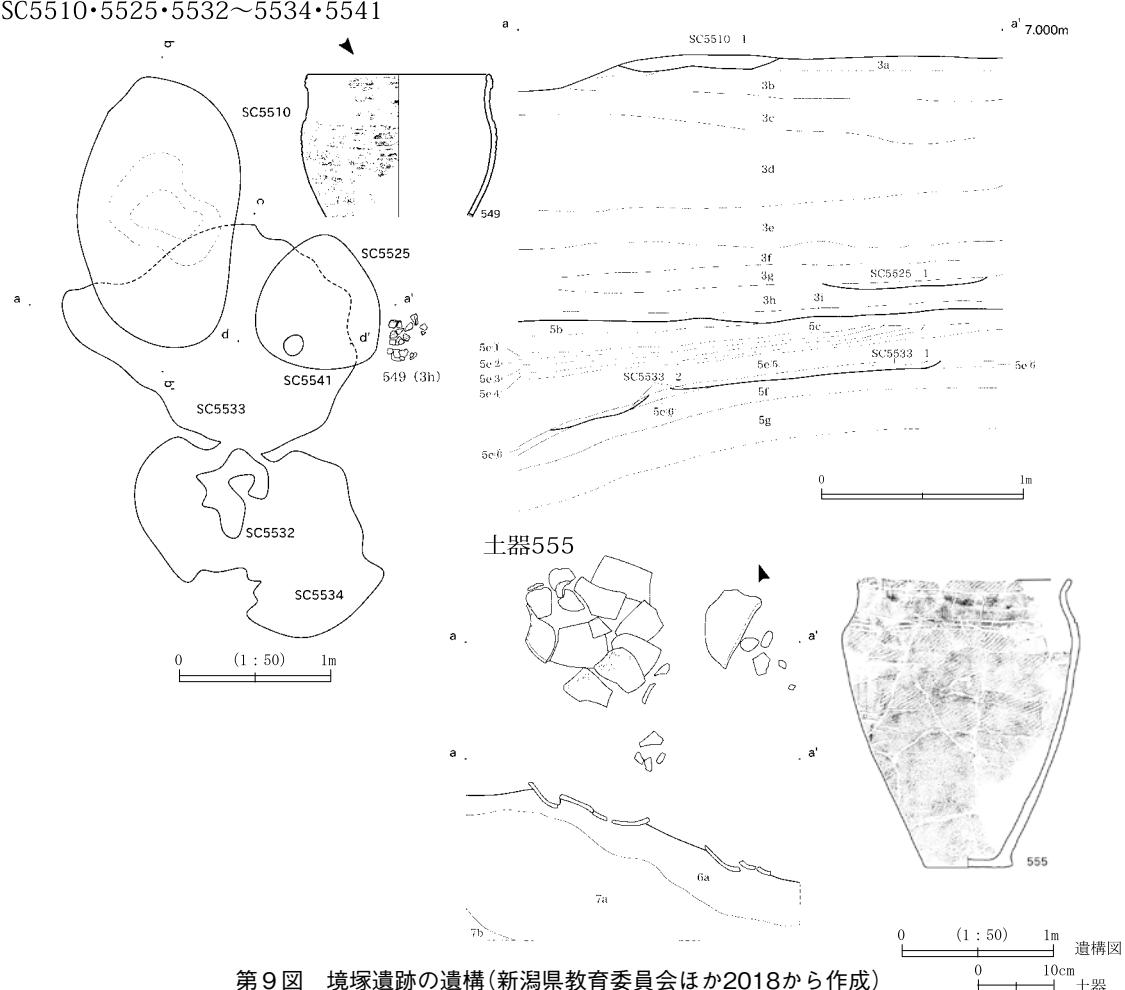
第7図 山口野中遺跡の遺構(新潟県教育委員会ほか2015から作成)



第8図 山口野中遺跡と境塚遺跡の位置関係(新潟県教育委員会ほか2015・2018から作成)



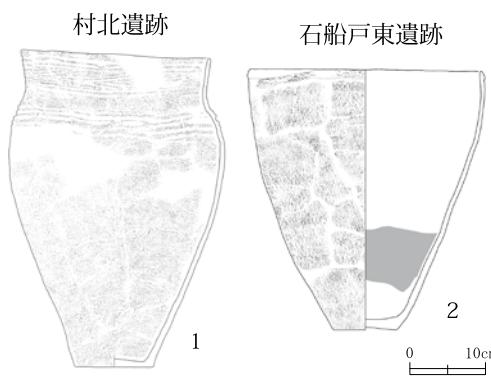
SC5510•5525•5532~5534•5541



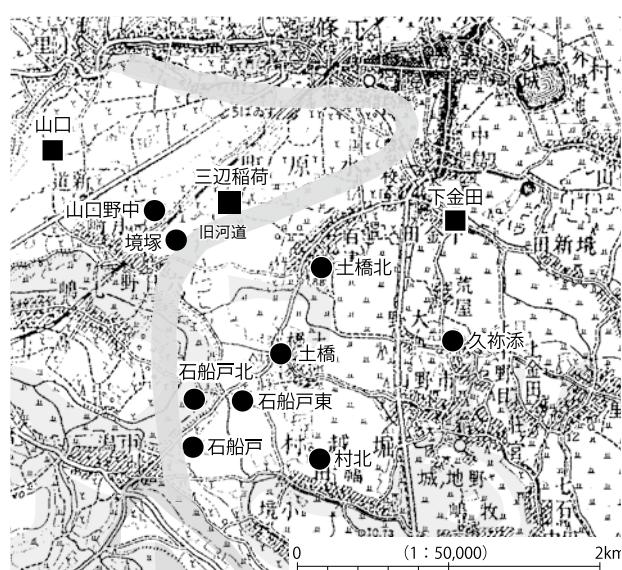
第9図 境塚遺跡の遺構(新潟県教育委員会ほか2018から作成)



第10図 土橋北遺跡の遺構(新潟県教育委員会ほか2019b)から作成

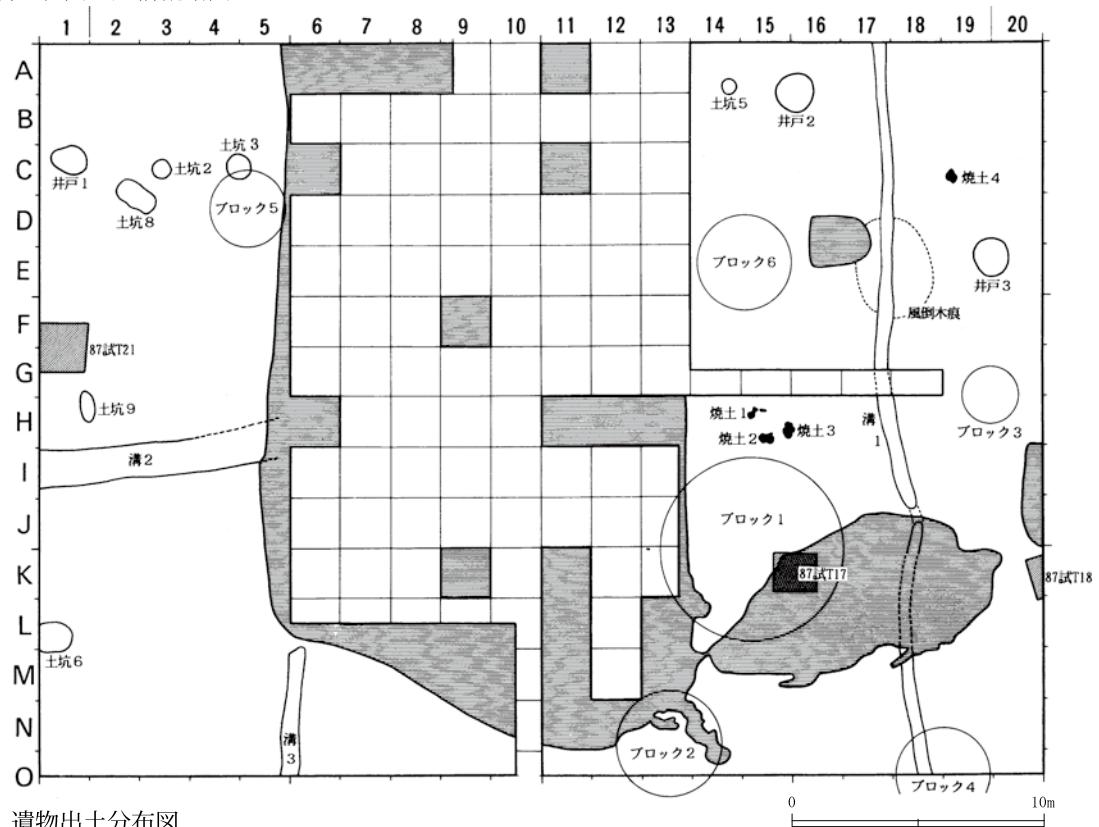


第11図 村北遺跡・石船戸東遺跡の土器  
(阿賀野市教育委員会2020、  
新潟県教育委員会ほか2019aから作成)

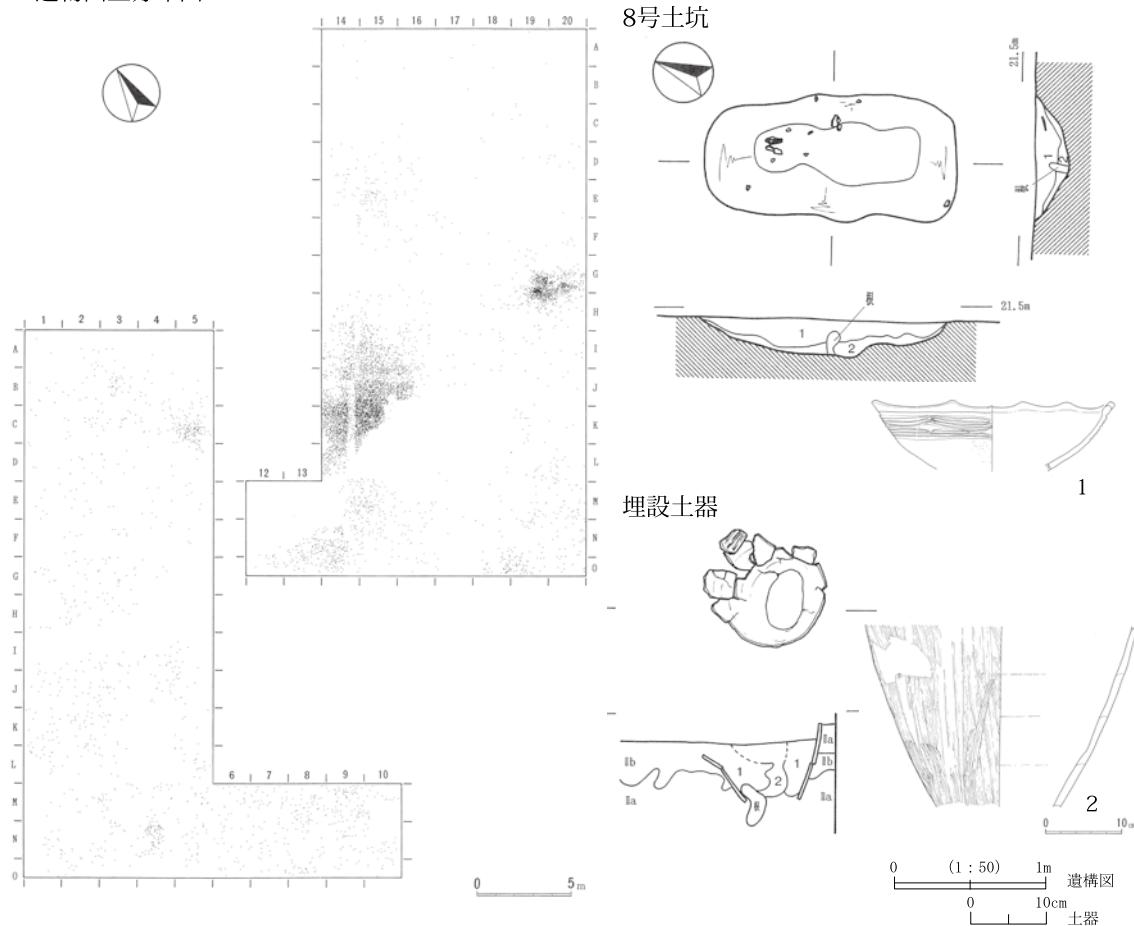


第12図 大規模旧河道と遺跡位置(荒川2020)

調査範囲・遺構概略図



遺物出土分布図

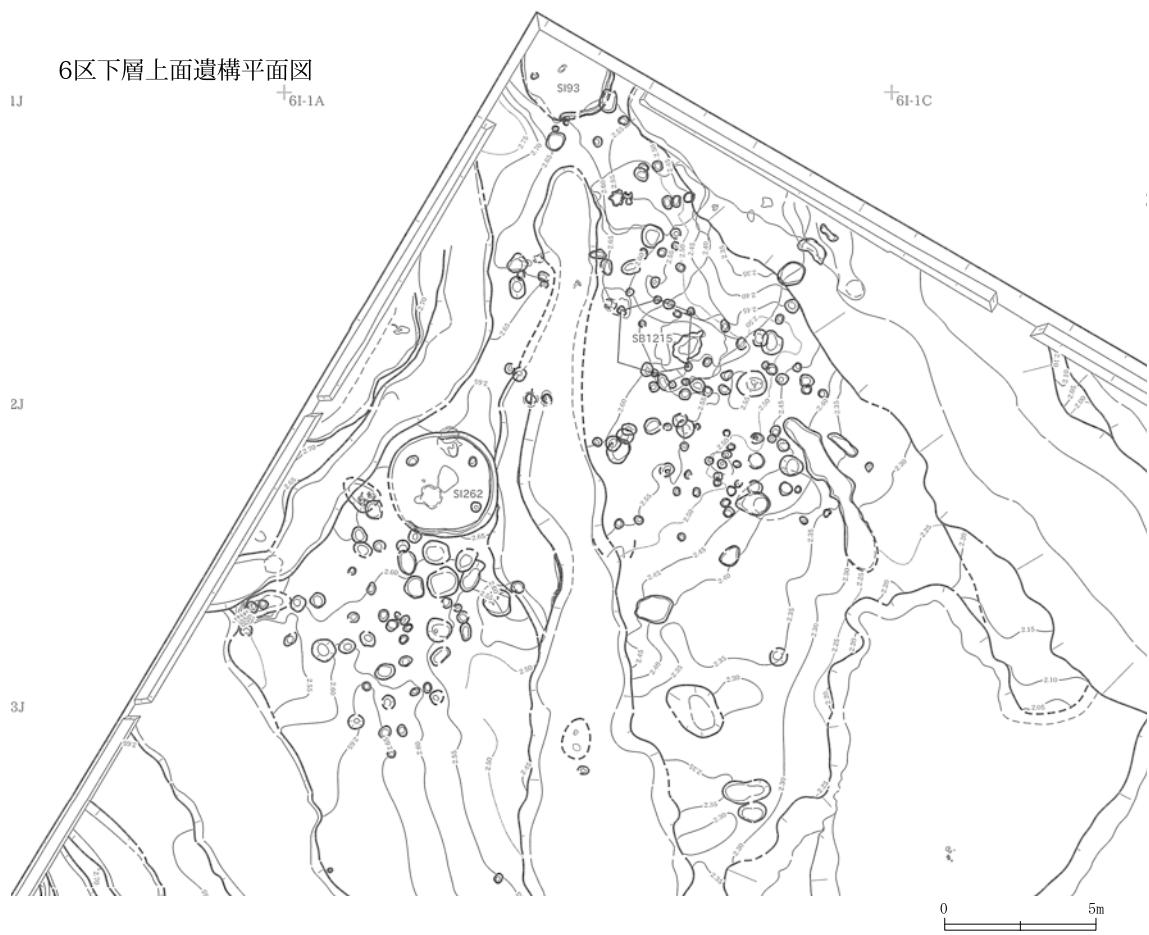


第13図 六野瀬遺跡の遺構(安田町教育委員会1992から作成)

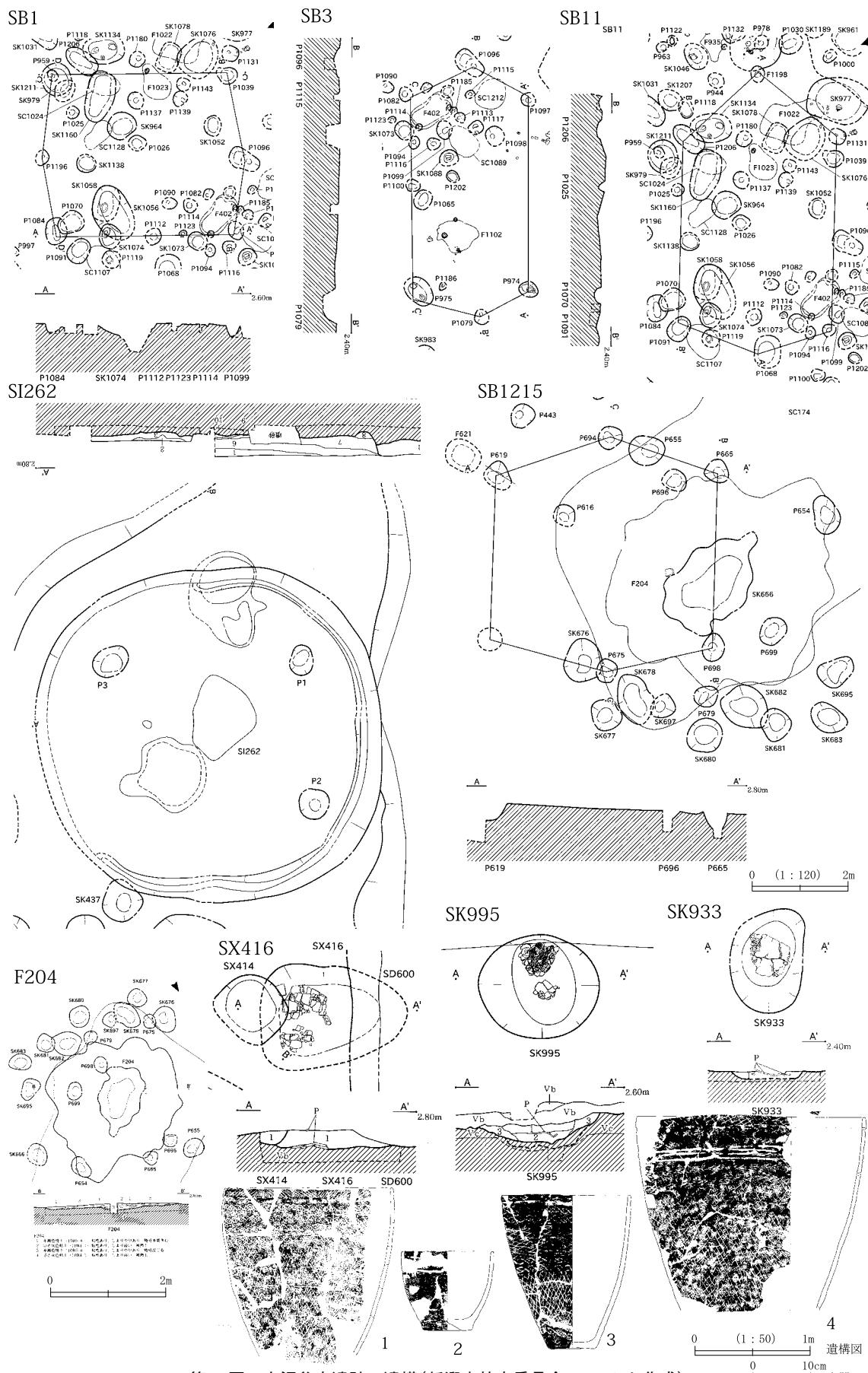
6区下層下面遺構平面図



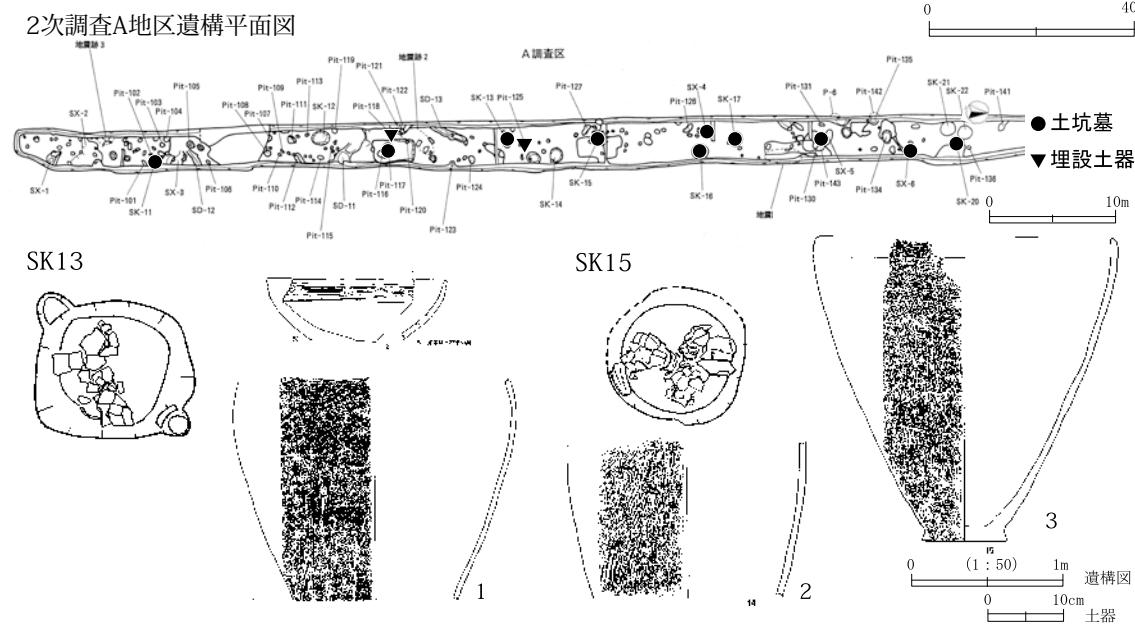
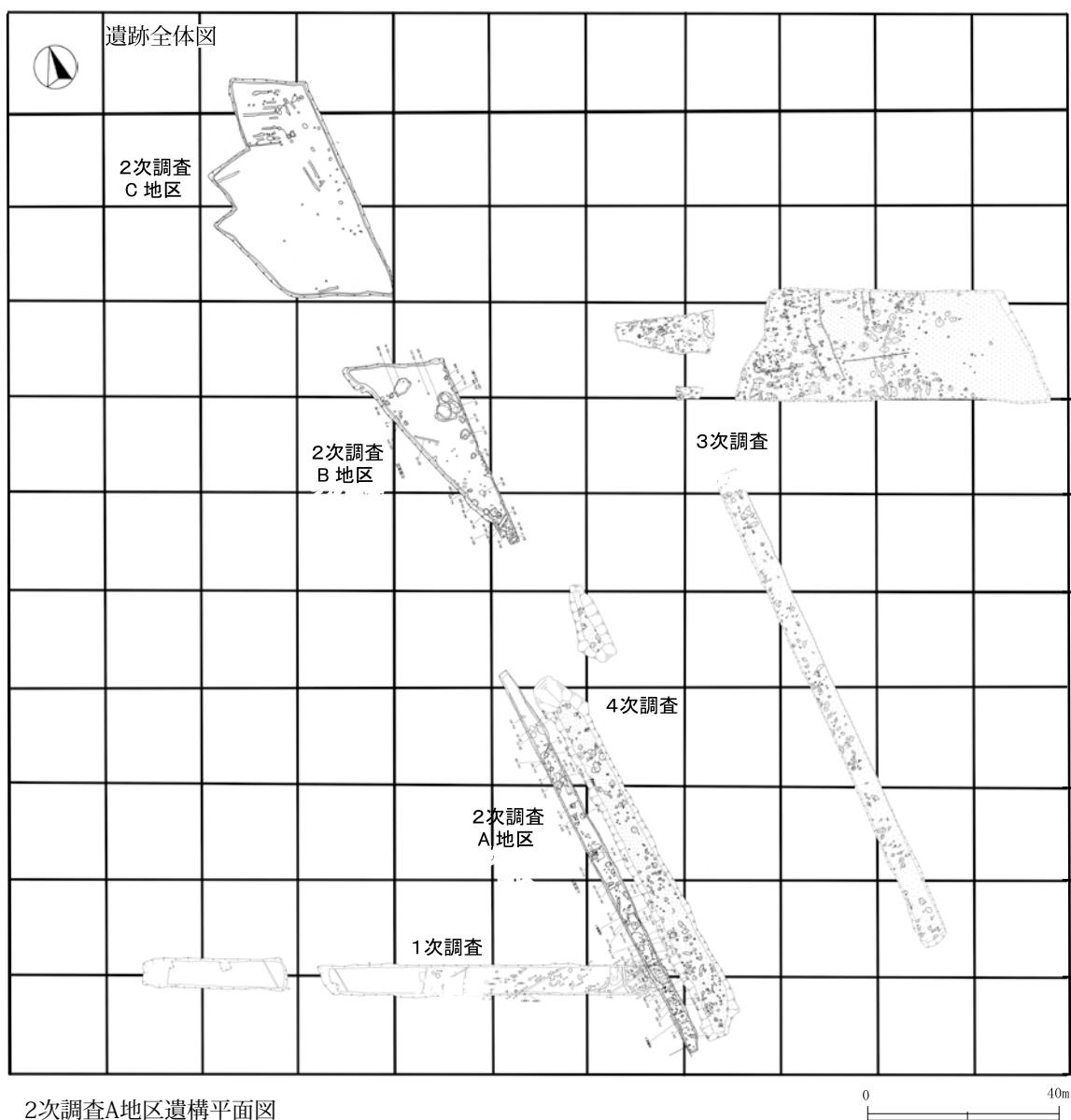
6区下層上面遺構平面図



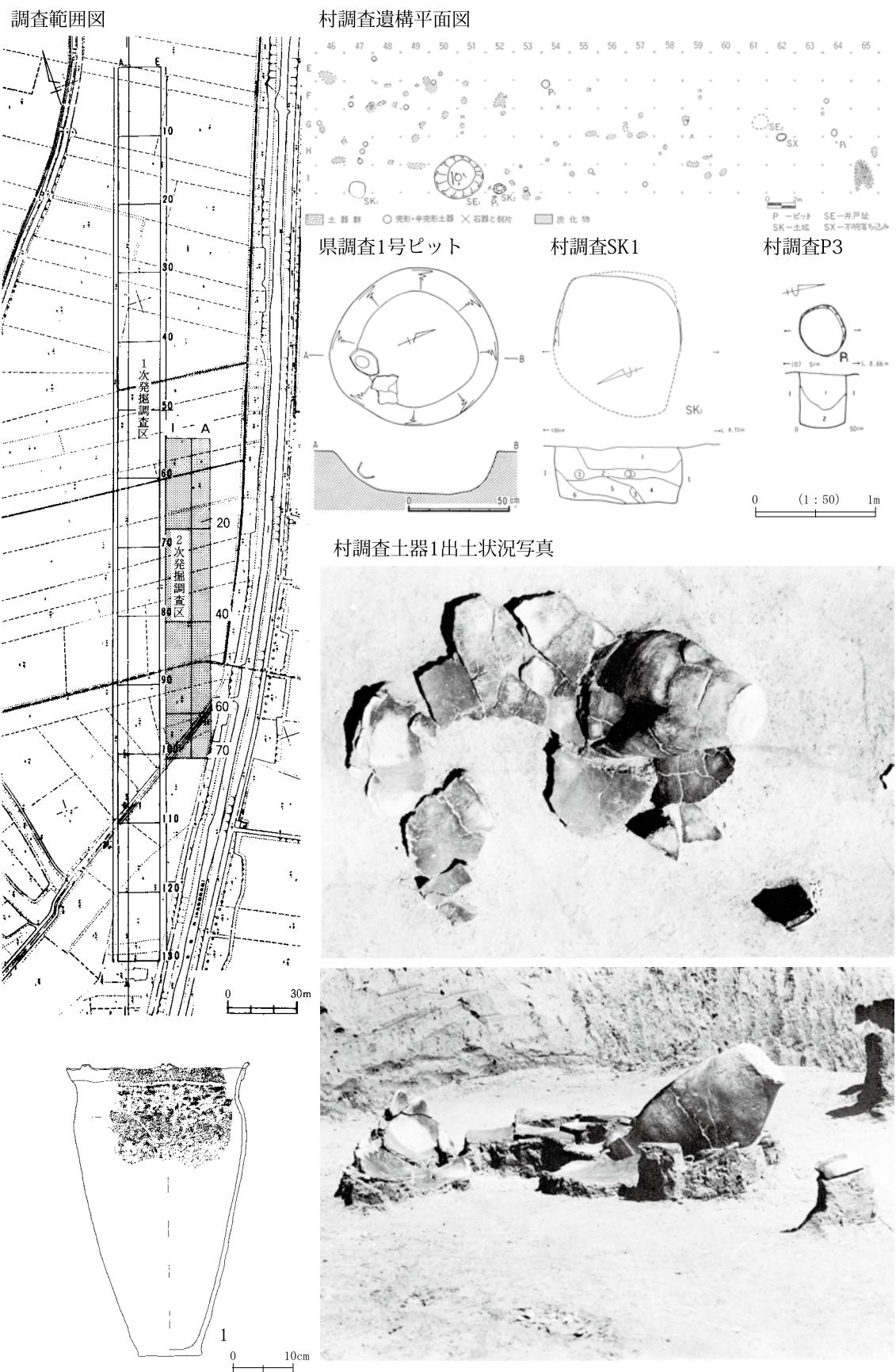
第14図 大沢谷内遺跡の遺構(新潟市教育委員会2020から作成)



第15図 大沢谷内遺跡の遺構(新潟市教育委員会2020から作成)

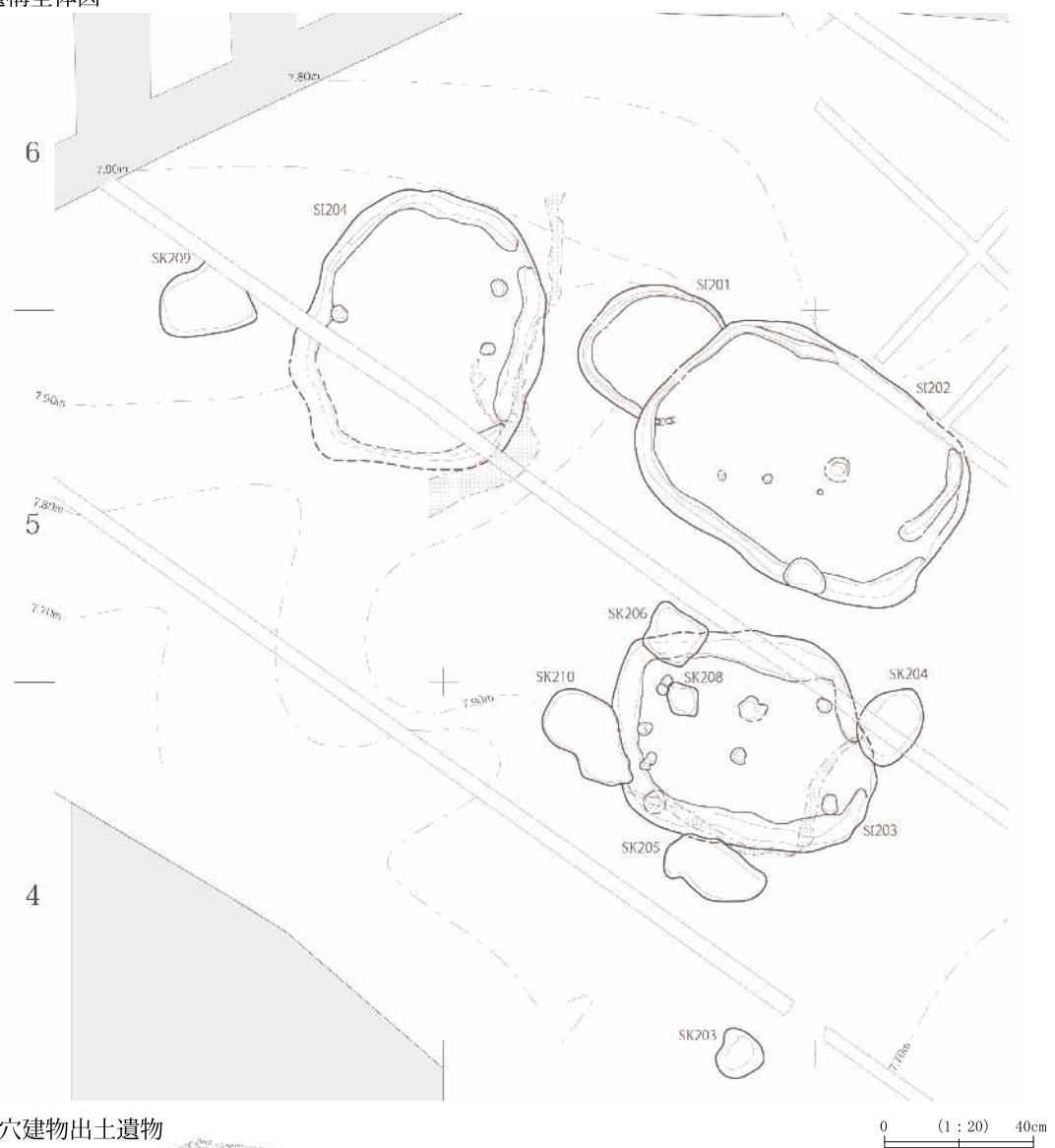


第16図 保明浦遺跡の遺構(田上町教育委員会1993・1996・2003・2004、荒川・阿部2022から作成)

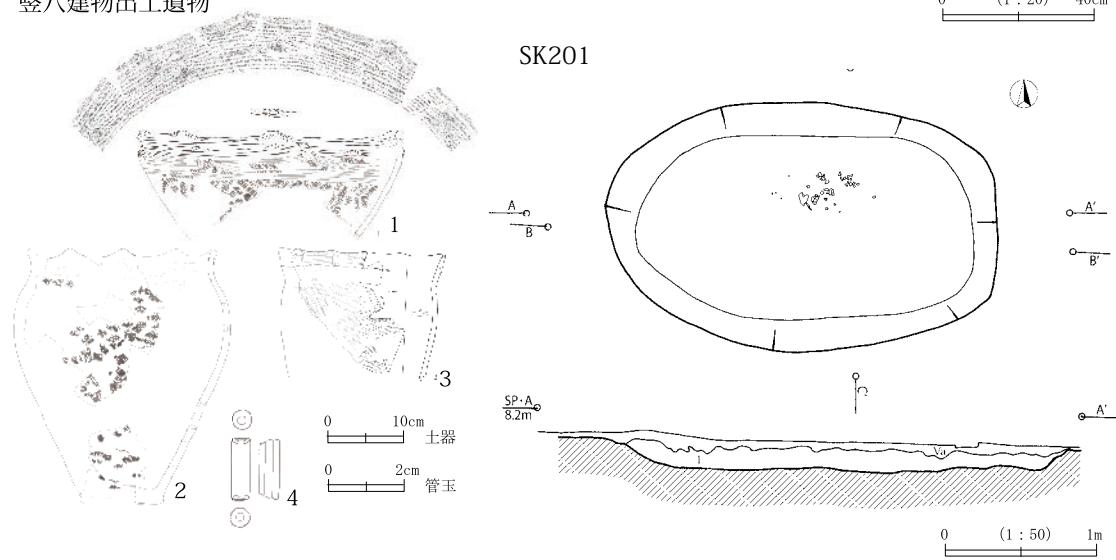


第17図 長畠遺跡の遺構(新潟県教育委員会1975、栄村教育委員会1979、荒川1998から作成)

遺構全体図

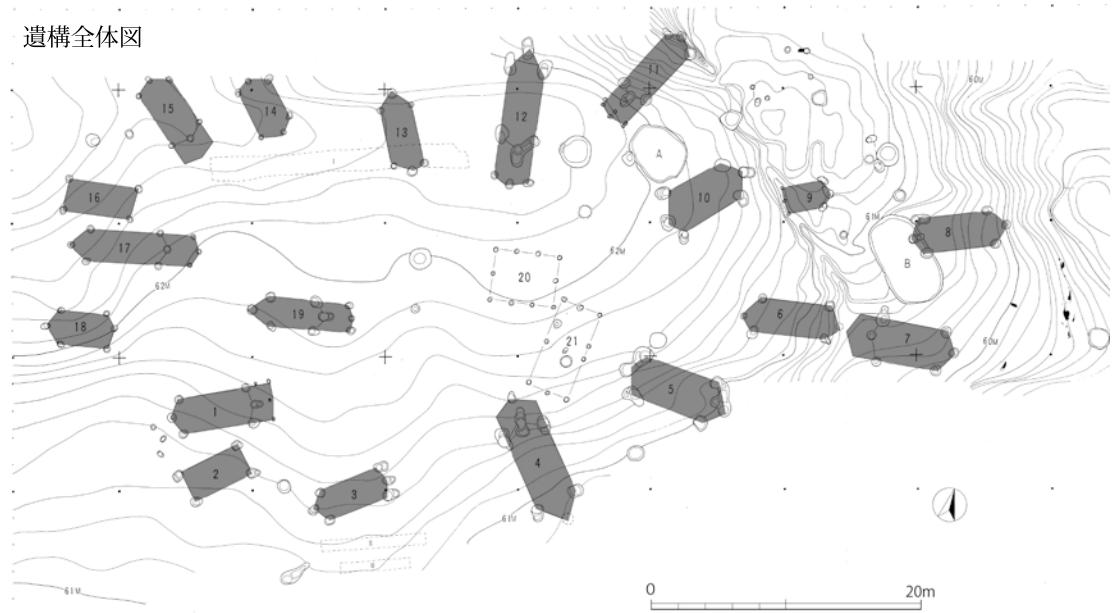


竪穴建物出土遺物

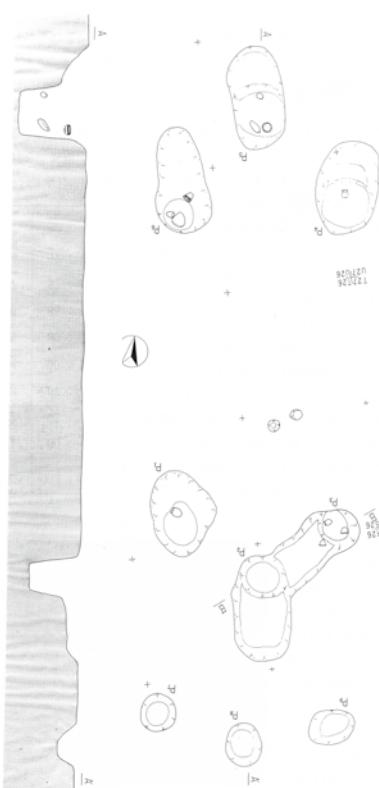


第18図 上道下西遺跡の遺構(新潟県教育委員会ほか2012から作成)

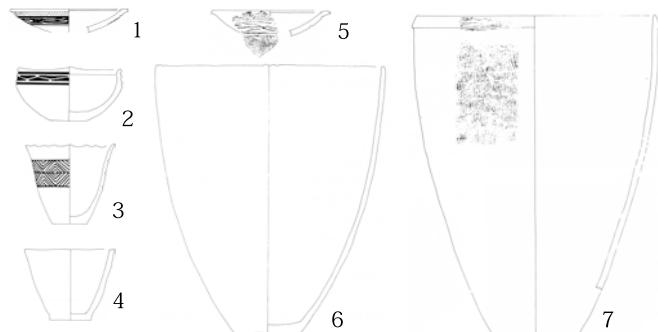
遺構全体図



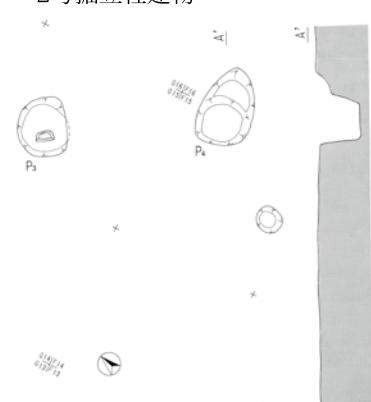
12号掘立柱建物



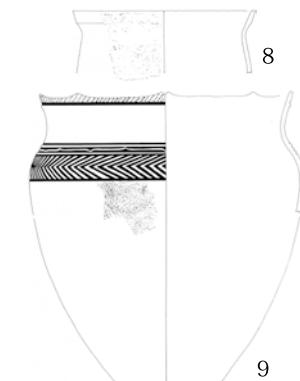
12号掘立柱建物P6出土土器



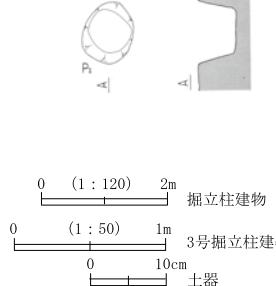
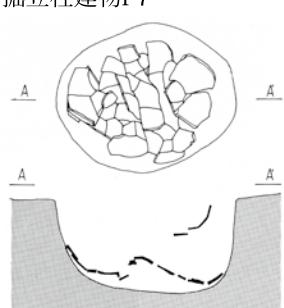
2号掘立柱建物



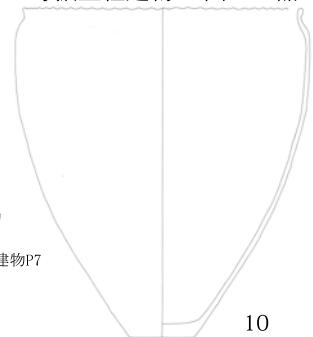
2号掘立柱建物P2出土土器



3号掘立柱建物P7



3号掘立柱建物P7出土土器



第19図 藤平遺跡A地点の遺構(下田村教育委員会1986から作成)